

# 教職課程センターだより 第18号

発行日 2017年11月20日

## 教員の学問する姿が学生に勇気と希望を与える……のではないかと思う

教職課程センター長 山本敏郎

最近、学生がやってきて、「先生の講義で励まされました。」と語りはじめました。

教育方法論では「指導とは何か」について話をします。指導理論研究の大先達の宮坂哲文、城丸章夫、そして師匠の吉本均の指導理論を紹介し、その現代的な意義を語り、少々アレンジしながら、管理・指導・支援について語ります。もう少し敷衍しておきましょうか。

指導とは子どもの自主性を引き出す行為です。子どもには指導を拒否する権利があり、指導は子どもの同意・納得を得るものでなければなりません。その意味では指導は自分にとって抵抗となる主体を育てる仕事でもあります。自分に抵抗する子どもを育てることによって自分の指導の正邪善悪を問うこともできるのです。だから指導とは子どもとの対話なのです。つまり、子どもの声が聞こえてくるように聴き、その声に応答していくことです。もっと具体的には、指導とは、子どもの要求を引き出し、その実現の見通しを示し、実現する行為をバックアップし、要求が実現したかどうかにかかわらず、結果を共有することです。

だいたい、こんなことを語っています。この学生によると、この話でこれまで生きてきた世界がひっくり返るのだそうです。高校までは、指導とは、子どもの話などは聴かないで、言うことを聞かせること、権威的・権力的で、抵抗だなんてとんでもないと言います。それが、この講義によって別の世界を見る（想像する）ことになる。そして、子どもの声を聴くことのできる教員になりたいと思えるようになってくる、というのです。

教えるというのは、相手のなかに勇気と希望を刻んでいくことだと実感する瞬間です。

専門職養成を旨とする学部・学科に勤めていれば、専門職に必要な知識やスキルを教えていくことは大切です。たとえば指導案は保育園から高校まで書けるように求められますので、書けるようにしないとイケません。しかし、大事なのは、現場が求めるとおりの指導案を書く力なのかと問われると、長く実践研究してきた身としては、“NO！”と言わざるをえません。指導案の様式は自治体ごとに違ふし、政策のトレンドでも変わってきます。現場が求めるとおりの指導案を書く力しか身につけていなければ、**大学で習った**様式と違ふ自治体に勤めたとき、政策のトレンドが変わったときには、たちまち対応できなくなります。大事なのは、指導案の様式や政策のトレンドがどうであれ、実践を構想する力です。そのためには、大学の授業は、指導案の書き方を教える講習会ではなくて、指導するとはどういうことかを考える**学問の場**でなくてはなりません。

授業を学問の場にするとするのは、教員が学問をしてみせることです。かつて学びは「知る―問う―確かめる」のサイクルだと書きました。指導とは何かについてどういう研究があったかを紹介（学生にとっては知る）、その意義とともに社会、学校、子どもの変化等に照らしてどう修正したらよいかを提案し（問う）、提案内容の確かさを確認していく（確かめる）。教員が一生懸命に問いを立ててその確かさを証明しようとする姿、そしてそれは学問をとおして聞っている教員の姿ですが、それを見て、学生ははじめて自ら問いを立てようと試みるのではないのでしょうか。また、学問に触れたとき、学生は勇気と希望を紡ぎ出すのではないのでしょうか。

学問とは、読んで字の如く、問うことを学ぶことです。小手先の授業方法や、迎合や、単位や点数をちらつかせた脅しはやめて、授業を**学問の場**にしていきませんか。学生の前で堂々と学問しませんか。



## 感謝

子ども発達学部 大和田 孝士

日本福祉大学には平成19年の4月からお世話になった。その直前までは県立の特殊学校（特別支援学校）に勤務していた。

特別支援学校では、難しい話はいらぬが困難なことや難しい問題はいっぱいあった。子どもたちの安全のこと、親御さんとの確執、職員が大勢でその分問題も多いこと等など。例を挙げれば、小学部の子どもが2階の窓から中庭に飛び降り酷く骨折したり、子ども同士のトラブルで、同じ親御さんが校長室へ二度も（別件で）尋ねて（怒鳴りに）来られたり、また職員の問題では「あろう事か・・・」と言いたいほど教員にあるまじき言動も多々あった。

大学では、全て学生さん自身の自己責任である、との認識で臨み、4年間の学生生活が充実した有意義なものであることと彼らの進路希望が叶うことを願って10年間過ごしてきた。

自身も奈良に居るときに、「大学の先生の道を世話するから・・・」と助言をくださった先生があったが、諸般の事情で愛知に帰り、結果的に特殊学校（特別支援学校）の教員をすることになった。途中定時制高校の経験もしたが、30年余障害児教育に力を注いだ。そのお陰で日本福祉大学で教鞭を執らせていただけることになった。

前にも書いたが平成19年の春から10年もの間、実に楽しく過ごさせていただいた。自宅から大学までは片道60キロ以上あり少々大変だったが、有り余る楽しみや喜びを感じながらの毎日であった。

子ども発達学部・教職課程センターの先生方を始め、名実ともに人品・実力ともに優れた方々に接し、いい年齢ながら我が振りを直したりする機会を持つこともできた。また、それにも増して、折あるたびに若い学生諸君と語らうことができたこと、特に奈良や京都へのフィールドワークで親しく話ってきたことなどはかけがえのない思い出になっている。

実に有意義で楽しい時空を過ごすことができた。先生方、事務の方々、学生諸君に感謝感謝である。心よりお礼申し上げます。本当に有り難うございました。

退職後は、先ず4月には書と絵の古稀二人展を開催した。そしてその後7月、8月の二つの書展に向けて大きな作品を書いたりし、結構忙しくしている。県立学校退職後にじっくり取り組みたいと考えていたことにも少しずつ取り組んでいる。気力と体力が続く限り続けていきたいと考えている。

今後とも日本福祉大学のさらなる御発展と学生諸君の前途に幸多からんことをお祈り申し上げ筆を擱きます。



## 退職に当たって（ご挨拶）

人間環境大学松山看護学部 岡 多枝子

日本福祉大学の皆様、在職中は大変お世話になり、誠にありがとうございました。

美しい美浜キャンパスでの授業やゼミ、教職課程や社会福祉を学ぶ学生の皆さんとともに「普通の暮らしの幸せ」としての「ふ・く・し」を求めて、教室・図書館・コミュニティでトライアングル型サービスラーニングやアクティブラーニングを行いました。

リフレクションの中で、人々の「普通の暮らしの幸せ」には固有性と普遍性があり、コミュニティにおける「居場所」と「つながり」によって実現できることにも気づきました。縦割りゼミでのゼミ合宿やKJ法ワークショップ、学内学会なども「居場所」であり、ゼミ長さんを中心とした「つながり」形成の中で企画、運営していきました。ドレスコードはスーツ、挨拶や言葉遣いなど社会的マナーにうるさい私の注文によく応じていただきました。

また、HBV感染などの社会的被害にあわれた当事者の方々との研究と教育を通して、社会的排除や生活困難の課題を検討し合いました。「笑顔があふれる福祉社会」を創る一步として、「高校への大学生出前授業」や「福祉教育研究フォーラムー高校生と大学生のつどい」に取り組む中で、高校時代に日本福祉大学を志望して後を継ぐ人たちも入学してきました。

私は今年から、故郷松山にキャンパスのある大学で働いておりますが、心の中にはいつも、美しい美浜キャンパスと学生・教職員の皆様のやさしい笑顔が浮かんでいます。

皆様、大変お世話になりました。どうぞお元気で。四国にお越しの節は、坊ちゃん列車と道後温泉、文学のまち松山にもぜひお越しください。お待ちしております。



## 小学校教育実習を終えて

子ども発達学部 子ども発達学科 学校教育専修3年 恒川貴広

私の担当学年は2年生で、この4週間で多くのことを学ぶことができました。その中でも、子どもたちとの向き合い方や授業に対する教員の姿勢のことを深く学ぶことができました。

子どもたちとの向き合い方については、子どもたちから近寄ってくれる子どもやそうでない子どもがいることから、クラス全員と話すことを目標に子どもたちと関わっていきました。その方法として毎日の給食時に子どもたちのところへ行って一緒に食べることです。4週間の間、普段、休み時間にも話せていない子どもを優先して回りました。子どもと一緒に給食を食べるとき、家庭のことや好きなものなど、たくさんのお話をしてくれました。時には、話に夢中になり過ぎて給食を食べることを忘れてしまい、慌てて食べる子もいました。子どもと話すときはその子の目線に合わせることができていると指導教員におっしゃっていただくことが出来ました。私は無意識でやっていたので全く気づかなかったけれど、目線を合わせることは大事なことだと改めて感じました。また、休み時間は校庭で学年問わず、思いっきり遊びました。一番多く遊んだのが鬼ごっこです。想像していた通り、子どもたちはとても元気でした。毎回へとへとになるまで走らされました。さらに、私が実習校に来た日はちょうど運動会練習期間中でしたので、100m走を何本も走らされました。これらのことを通じて、子どもたちと深く関わることができたのではないかと思います。

授業に対する教員の姿勢については、課題が残るものばかりでした。授業の進め方はまず、時間内（45分）に必ず終わらせること。これが大前提であると学びました。そして、子どもの様子を見ながら進めていくことが大事であると学びました。授業の進行についていけない子どももいるということ。さらに、全員が理解しているかを机間巡視や挙手などから様子を見ること。例え、教員側としてはここまで進めたい、という計画があっても子どもを優先すること。いい授業というのは、子どもたちがいかに理解できているかに尽きるのではないかとということ。“指導案通りにしなくてよい”という意味を理解することができました。しかし、私は合計で8回授業をさせていただきましたが、ほとんど時間内に授業を終えることができませんでした。その原因は、発問（指示）の仕方に問題があったからです。要点を絞らずダラダラと話し、結局何言っているのか分からなくなってしまっていました。校長先生からのアドバイスで、子どもたちに“考えさせる時間”を設けることが大切だと教わりました。まずは一人で考えて、次に隣同士または班でその考えを共有し、それを意見としてクラスに発信する。これこそが、“学び合い”であると学びました。

小学校での教育実習を通じて、子どもに対する考え方や授業に対する捉え方が変わりました。特に授業に関しては、“学び合い”もそうですが、そのための仕掛けを教員が作っていくことが大切であると学ぶことができました。同時に、授業をする力が全然足りていなかったことを痛感しました。発問や時間、授業の流れの繋がりが自身の課題だと知ることができました。実習中、悩みや大変なことはいろいろありましたが、不思議とそれは苦に感じず、楽しいという感情で満たされていました。改めて、私は本当に子どもと関わることが大好きなのだ実感することができました。

これからの大学生活は、教育実習で学んだことを活かしながら、新たに気づかされた課題を一つでも克服できるようにしていきたいです。そしてなにより、教育実習を通して“教員になりたい”という思いがより一層強くなったので、教員採用試験の勉強も含め、しっかりと頑張っていきたいです。





## 生徒を理解し、向き合っていくことの大切さ

子ども発達学部 子ども発達学科 学校教育専修4年 村田咲奈

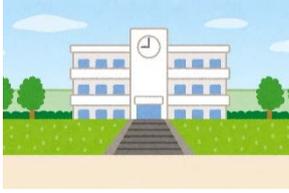
私は中学校2年生のクラスに配属させていただきました。昨年、3年次に小学校での教育実習を行っていたので、教育実習自体は二度目でしたが、小学校での経験を生かしてさらに多くのことを学ぶことができました。その中でも、生徒理解の大切さを改めて感じました。

地理の授業を4クラスで行わせていただきましたが、クラスによって生徒の雰囲気は大きく違いました。例えば、あるクラスでうまくいったと思った授業を、他のクラスで同じように行ってみると、うまくいかないことがありました。この経験から、同一の授業を行うにあたって、まずは、生徒の実態を知り、彼らのどういった良さを活かして、どのような力を身につけさせたいのか、ということを考えながら、発問の仕方、机間指導での声かけなどを変えていくことが必要だと学びました。そして、教科担任制だからこそ、他の先生方との情報共有が大切だと感じました。

また、実習初日から積極的に生徒一人ひとりと話すことを心がけました。うまく関わるできない生徒に対しては、まずは挨拶や机上指導で前向きな声かけを行い、少しずつ関わっていけるよう心がけました。その結果、あまり授業に参加できていなかった生徒が、積極的に挙手する姿が見られ、授業準備なども手伝ってくれるようになりました。

中学校での教育実習を通して、教員が生徒と向き合い続けていけば、少しずつ生徒との信頼関係を築くことができると実感することができました。教育実習での学びを活かして、生徒と親身に関わるのできる教員をこれからも目指していきたいと考えています。





## 教育実習体験記

子ども発達学部 心理臨床学科 障害児心理専修4年 鈴木日菜

私は5月から6月にかけての三週間、母校の高等学校で教育実習をさせていただきました。高等学校での教育実習は、授業をすることの難しさや楽しさを実感できた三週間だったと思います。どんな話し方なら伝わるかな？板書の方法は？色づかいは？プリントの構成は？どこが穴埋めになっていると重要性が伝わるかな？教材はこれでいいのかな？など、本当にたくさんのことを考えて、考え尽くしました。それでも授業をしてみると上手くいかず、自分の力不足を痛感しました。この時、大学で模擬授業をやったときに、生徒がいるつもりでもっと真剣にやっていたら良かったと感じていました。また、自分の知識不足も理解しづらい授業に拍車をかけていたと思います。しかし、生徒が授業を真剣に聴いてくれたときやグループワークを楽しそうに行っている姿を見たとき、感想に「もっと学びたいと思った」と書いてあるのを読んだときに、私自身ももっともっと成長して、生徒が学ぶことを楽しいと感じられるような授業をしたいと思いました。

授業以外にも、学んだことはたくさんあります。クラスの運営をどのように行うのか、部活や校務分掌の仕事など、指導教官の先生から学ぶことはとても多く、三週間だけでは学びきれないほど、教員は多忙で奥深い仕事だと感じました。教育実習を通して生徒と関わり、様々な経験をしたことで、自分がこうなりたいという未来の姿が確かなものになりました。この経験を、実際に教員になったときにも生かしていきたいと考えています。



## 教員採用試験二次対策講座を受講して

子ども発達学部 心理臨床学科 障害児心理専修4年 河合夏希

教員採用試験二次対策講座に参加して、本当によかったと心から思いました。午前中は山口正先生や特別支援学校で働いている先輩方の話を聴きました。そこで、教員という職業は大変だけれども、とてもいきいきしている先輩方の姿を見て、やりがいのある職業なのだと感じました。午後は個人面接と模擬授業を受講しました。個人面接では、先輩に面接官をしていただき、的確なアドバイスをもらうことができ、とても勉強になりました。また、それまでは岐阜県の教員採用試験受験を予定している仲間で作った自主ゼミの中でしか対策をしていなかったのですが、他の自治体を受ける人たちにもアドバイスをもらうことができ、短い時間でしたが学ぶことが多く、とてもよい機会でした。模擬授業では、先輩方に見てもらい、仲間同士では気づかなかったことを指摘してもらいました。実際の授業はどんな感じなのか、どんなことに気をつけているのかなど、いろいろな話を聴き、もう一度授業を練り直す機会ができました。どちらの講座でも、先輩方は必ずよかったところを言ってくださいました。このことから、自分の持ち味を大切に頑張っていこうと思えました。今回の講座をきっかけに、私は先輩とつながりをもつことができ、こんな先輩方と一緒に子どもたちを育てていきたいと強く思いました。また、先輩方のような、素敵な教員になりたいと心から思いました。そして、なにより、一緒に教員を目指す仲間と悔いが残らないように最後まで精一杯やりきろうと思いました。



## 2017年度実施 教員採用試験結果情報



教職課程センター運営委員・教員採用対策講座WG

山口 正 (子ども発達学部教員)

### ◆今年度の合格倍率と4年生の試験結果

2018年度採用(17年度実施)公立学校教員採用選考試験は、47都道府県20政令市1地区で6月から9月にかけて実施され最終結果が11月までに発表されました。各調査によれば、2018年度採用の平均合格倍率(受験者数/最終合格者数)は4.6倍、2010年度採用の6.2倍から毎年減少傾向が続いています。同倍率が高い県市は、沖縄県9.0倍、鹿児島県8.3倍、熊本市7.1倍。低い県市は、愛媛県3.1倍、北海道・茨城県・福岡県3.2倍。また受験校種別の平均倍率は未確定も含みますが、小学校3.0倍、中学校5.7倍、高校7.5倍、特別支援学校3.6倍、養護教諭6.7倍、栄養教諭6.9倍となっています。平均合格倍率が低下傾向にあるとはいえ、公立学校の教員採用試験は受験県市・校種によって試験内容が異なり、教員としての多様な能力が求められる、難しい就職試験であることには変わりありません。

今年度は4学部(子ども発達・社会福祉・経済・国際福祉開発)から約100人が採用試験に挑みました。11月時点で教職課程センターが把握している試験結果状況をまとめるとつぎのとおりになります。1次試験の合格者数は46人(合格県市数は延べ63)、2次(最終)合格者数は26人(合格県市数延べ32・うち補欠1)。2次合格県市の内訳は全体で10県3市(人数):神奈川県(6)富山県(3)石川県(2)長野県(2)岐阜県(2)静岡県(4)愛知県(6)三重県(2)岡山県(1)沖縄県(1)浜松市(1)名古屋市(1)神戸市(1)、受験校種:小学校(22)特別支援学校(9)高校(1補欠)という状況です。その他に私立学校で1人が合格、卒業生17人から合格連絡が届いています。

### ◆多様な就職支援 育てていきたい教員をめざす仲間の輪

教員をめざす学生の試験準備支援は、キャリア開発課と教職課程センターの共催連続企画(教員採用講座)をはじめ、キャリア開発課のCDP講座や個別支援、学部ごとの支援(独自企画)など多様に取り組みられてきました。合わせて、教友ゼミや自主ゼミといった教員をめざす学生同士の学び合いを重視してきました。こうした支援をとおして、教員をめざす“仲間”のなかで変わっていく学生たちを今年も多く見ることができました。学生のひとは採用試験を「大学受験のリベンジ」として位置づけ、早くから試験準備をしていたそうです。就活は「個人戦」だと思っていた自分が自主ゼミと出会い経験するなかで、「ともに合格したい、働きたい」と思う自分になったそうです。また、不合格通知を受け取った学生のひとは、辛い気持ちを乗り越えることができたのはともに学び合った経験と結果に向き合ってくれた仲間の存在だったと告白しています。“仲間の支え合い”は本学の特徴です。教員をめざす仲間の輪を大きく育てていきたいものです。これから受験される学生たちは先輩の受験(準備)体験から大いに学んでください。



## 合格体験記 愛知県・神奈川県（小学校）

子ども発達学部 子ども発達学科 学校教育専修4年 有賀みのり

私は小学校で愛知県と神奈川県を受験し、両県とも合格することができました。みなさんのお力に少しでもなればうれしいです。

### 1. 自主ゼミについて

- 11月に有志で自主ゼミ開始

週1回位で教職教養の勉強を中心に（問題を出し合いや質問して深める）

12月頃から、面接練習。4月からは週2回で教育課題について深める時間と面接の時間

- 3月から愛知県の自主ゼミに参加

3月の終わりまでに願書の完成を目指し、検討会を重ねる。その後は、スケジュールを組んで集団面接と小論文、愛知の時事問題対策、集団討議を中心に。（週2回）一次試験後は週3回。小論文は検討会、時事問題・集団討議・場面指導は主に過去問から。神奈川は模擬授業の練習が中心。

### 2. 筆記の対策について

11月頃から勉強開始（教員養成セミナー、これだけ覚える教員採用試験、演習問題、過去問）問題で見たことがある用語にするしをつけていくとそれが増えていって出題傾向がわかる。1回見たことあるのに答えられないと悔しいから覚える。学内外問わず様々な会社の模試を受験する。

### 3. 教員採用試験を終えて

私にとって教採は、自分の人生を振り返る期間であり、次の一步へのチャージ期間であったと思っています。特に面接は、自分の経験を総動員して立ち向かっている感覚でした。質問に答えたり、面接ノートを作成したりする中で自分のこれまでの歩みを再確認したり、私の長所って何だろうと悩み、このままでいいのかと不安にもなりました。面接で話していることが嘘っぽく、薄く思えてきて、いい人を演じている自分に自己嫌悪になることも多々ありました。面接や小論文の対策本を読んだり、講座に行ったり、たくさんの先生方や受験する仲間からアドバイスをもらったりしました。対策をやっていると何か正解が教採にあるような気がして、それを求めてしまいがちになります。たくさん迷い、悩みましたが、私は「自分らしくいること」が一番大事だと思っています。同じようなことを言っている人にもその人にしか語れないのです。その人が経験したのなら、その人にしかない固有のものです。たとえ、失敗や人には言いたくないような恥ずかしいことだとしても、そのひとつひとつが自分の教育観や人生観に影響を与えていると思います。だから、自信を持ってください。偽りの自分ではなく一人ひとりに必ずある個性やオーラを見失わず、教員になった姿を頭の中でイメージしながらいきいきと望んでください。

合格者ではなく「教員」になりたい。合格することをゴールにしたくない。それだけは、心に決めていました。筆記の問題でわからない問題があったときも「私は、教員なのだ。これがわからなくてどうする。」と自己暗示をかけて勉強していました。これでモチベーションを保っていました。面接練習も様々な人の意見を聞き、自分の意見をわかりやすく話すといった自分の専門性を高める期間としてポジティブにとらえるようにしてきました。そして、この合格体験記は「合格した」人が書いています。合格か不合格その2択で決められてしまう現実があります。不合格であってもそこにはその人が必死で取り組んできたそれぞれのドラマがあって、葛藤があった1年間を共に過ごしてきました。つらいときも支えてくれた仲間がいます。がんばってください。



## 合格体験記 富山県（小学校）

子ども発達学部 心理臨床学科 障害児心理専修4年 種部真帆

富山県の専門科目である小学校全科は4教科型（国語、算数、理科、社会、英語）であり、一般教養の内容と重複するため、一般教養と並行して学習に取り組みました。使用したテキストは、協同出版の過去問題集、東京アカデミーの全国自治体過去問題集、CDP講座で購入した東京アカデミーのテキストのみです。多くのテキストに取り組むのではなく、自分に合ったテキストを最小限に絞り、何度も繰り返し取り組むことで知識が定着したと思います。特に、教育法規等、新しく知識を定着させなければならない内容に関しては、1冊のテキストに絞り、色付きマーカーで塗りつぶして丸暗記しました。また、富山県はマーク試験ではなく筆記試験のため、学習指導要領内容等の漢字のミスがないように何度も書いて暗記しました。

### 〈口述試験対策〉

富山県は、一次試験に集団討論、二次試験に模擬授業（当日作成）・個人面接が行われます。集団討論対策は、集団討論が行われる他の自治体の仲間と共に練習をしました。また、実際に講師として働いている方と練習したり、学習アドバイザーの方に指導して頂いたり、視点に偏りが無いよう、様々な意見を取り入れながら練習しました。模擬授業対策は、教科と学年を絞り、全単元の板書計画を考えました。個人面接対策は、富山県を受験する仲間はもちろん、他の自治体を受験する仲間とも共に練習しました。また仲間の面接練習を見学することで、様々な考え方を習得することができました。

面接練習全体を通して、面接ノートを作成することが大切だと思います。練習した内容を記したり、様々な質問に対する答えをまとめたりすることで、自分の考えを整理しやすくなります。また、毎日教育新聞に目を通し、今の教育問題を自分の問題として捉え、考えをまとめておくことで、面接や論作文に活かすことができると思います。

### 〈教員採用試験に向けて〉

教員採用試験は個人戦ではなく、団体戦です。はじめは私もただのきれいごとだと思っていました。しかし、対策や勉強を進めていくうちに、仲間の存在の大きさに気付きました。人との出会いや関わりを大切に、自分にないものをたくさん吸収してください。疲れた時は、仲間と一緒にご飯に行ったり、美浜の海で思いっきり遊んだりしてください。教員採用試験は、自分を大きく成長させてくれると思います。



## 合格体験記 岡山県（特別支援学校）

子ども発達学部 心理臨床学科 心理臨床専修4年 大屋晴奈

### 《受験勉強》

私が本格的に教採の勉強を始めたのは4年生になってからでした。3年生の頃にCDP講座を受けており、自分で勉強をしないと…とってはいたものの、なかなかやる気が起きませんでした。4年生になり、教採が数ヵ月後に迫ってくるとようやく今のままではまずい！と思い、勉強を始めました。私は家にいるとやる気スイッチが入らないため、毎日図書館に通って勉強をしていました。私が受験した岡山県は教職教養と特別支援教育について出題されます。過去問を解いてみると、出題傾向が見えるため、私は過去問で出題されていた資料などを読み込みました。教採の勉強は範囲が広く、全て覚えようと思うと無理があるため、勉強を始める前に受験する都道府県の出題傾向をつかむことが大切だと思います。また、覚えないと！と思って覚えるのはなかなか辛いので、同じ問題を繰り返し解くことで自然と覚えるのが良いと思います。毎日の勉強は大変なので、疲れた時には友達と遊ぶなど息抜きをすることも大切だと思います。

### 《使用したテキスト》

- ・協同教育研究会 教員採用試験「過去問」シリーズ 岡山県・岡山市の教職・一般教養 過去問
- ・協同教育研究会 教員採用試験「過去問」シリーズ 岡山県・岡山市の特別支援学校教諭 過去問

### 《試験当日》

一次試験では、筆記試験と個人面接がありました。日本福祉大学から岡山県を受験する学生は私以外におらず、当日は知り合いがいない状態で不安な気持ちもあり、とても緊張していました。筆記試験の後には面接が控えていたため、なんとかしてこの緊張をほぐしたいと思い、思い切って受験者に話しかけてみました。話しかけた受験者も緊張していたようで、お互い話しているうちに緊張がほぐれ、落ち着いて面接に臨むことができました。当日は思い切って受験者に話しかけてみるのも手かなと思います。面接試験では、保護者との連携について多く聞かれました。どんな質問をされるかわからないため、不安もあるかもしれませんが、落ち着いて自分の思いをしっかりと伝えることが大切だと思います。

二次試験では、小論文、グループワーク、個人面接、模擬授業・口頭試問がありました。グループワークのメンバーは事前に発表されます。そのため、試験までにメンバーと話をしておくと思えます。個人面接では一次試験よりも細かく質問されます。岡山県を志望する理由や岡山県の特別支援学校について知識を深めておく必要があります。模擬授業は岡山県の場合、その場で国語か数学、どちらかを選択し、導入部分だけ授業を行います。面接官は授業内容よりも子どもとどう関わりを持ちながら授業を行うのかを見ていると思います。子ども役の面接官が途中で話しかけてくることもあります。対策としては、子どもとの会話をしながら授業を進める方法を学んでおくことが必要だと思います。

### 《最後に》

試験当日はとても緊張します。私は他の受験者に話しかけることで緊張をほぐしましたが、なにか緊張をほぐせる方法を持っていると良いと思います。教員になりたいという強い思いが面接官に伝わればきっと大丈夫だと思います。自分らしさを大切に頑張ってください。応援しています！！

# 卒業生からのたより



子ども発達学部 子ども発達学科 保育専修 2013年度卒業 水畑和花香<sup>わかこ</sup>

私は、2014年に子ども発達学部子ども発達学科保育専修を卒業し、現在は愛知県の特別支援学校で講師として働いています。

大学卒業後の2年間は、愛知県内の障害者入所施設で働いていました。障害のある子どもたちが大人になった後、どのような人生を送るのかを知りたくて入職。はじめは、介護がメインの毎日に戸惑うことばかりでしたが、戸惑いの分だけ学んだこと、気付かされたことがたくさんありました。豊かな人生を送るための土台づくりをするために特別支援学校で働きたいと考えたのも、子どもの頃の経験の豊かさがその後の人生の豊かさに繋がっていると気付かせてくれた利用者さんや保護者の方との関わりがきっかけです。

特別支援学校で働きたいと考えた時、持っていた免許は幼稚園教諭と特別支援学校教諭のみ。山本敏郎教授や教職課程事務室の職員の方々に相談をして、お力を貸していただきました。そして1年間、働きながら通信制の大学に通い、小学校の免許を取得することができました。

2016年4月から、特別支援学校で働いています。大学を卒業してからまだ3年半。私自身が持っている指導、支援の引き出しはとても少ないです。どうしてこの子は怒っているのか、どうしてこのような支援、指導を行うのか。支援、指導の引き出しを増やすために、周りの先生方のやり方を見たり、話を聞いたりして多くのことを学んでいます。悩み、考え、教わり、学び。そして、子どもたちの成長に喜びを感じる毎日です。

4月は新しい環境にも慣れず、1日の大半を怒ったり泣いたりしていた子どもたち。2学期も2か月が過ぎ、少しずつわかることやできることが増え、1日1日を落ち着いて過ごせるようになってきました。そして、子どもたちの笑顔も増え、物事を吸収する力もぐっと伸びてきています。内言はたくさんあるが、発語がなかった一人の男の子。2学期に入り、「おかあさん。」「ばば。」と言葉を発するようになりました。「今日、お母さんお迎えだね。」「ばばも来るかな。」などと出てくる言葉を一つ一つ受け止めていくうちに「おもちゃをください。」「(お茶の)おかわりをください。」などと言葉で自ら要求を伝えられるようになってきました。ジェスチャーで「トイレに行きたい。」と伝えてくれることもあります。思いが伝わればちゃんと受け止めてもらえるということがわかり、泣いたり怒ったりする前に言葉やジェスチャーで伝えようとする姿が増えたことに嬉しくなりました。

学びと喜びに溢れる充実した日々を送っていたところ、愛知県教育委員会から採用試験の合格通知が届きました。思いを表現する力を育むことを大切に、子ども一人一人としっかり向き合いながら豊かな人生を送るための土台づくりができる教員になれるよう、これからも先生方や子どもたちから多くのことを学びながら一生懸命頑張っていきたいです。





## 「ねえ、せんせい」

子ども発達学部 心理臨床学科 障害児心理専修 2016年度卒業 丸山明

明日から、本当の「先生」になるのか。期待と不安でなかなか眠ることができなかった4月から、あっという間に半年がたちました。私は2017年3月に日本福祉大学を卒業し、現在、地元長野で小学校教諭として22人の1年生と日々過ごしています。ドキドキの入学式が終わり、子どもたちと教室へ。緊張している彼らの顔を一人一人見て、「ああ、他の誰でもないこの私が、ここにいる1年生の『先生』になるのか」と実感し、背筋がぴんと伸びたのを今でも覚えています。

毎日が初めての日々。授業から、子どもたちのケンカから、給食から掃除まで、うまくいかないことばかり。毎日お風呂場でひとり反省会をしています。そして、今日こそは、と期待を込めて朝家を出ています。反省、期待、反省、期待…慌ただしく過ぎてゆく毎日。周りを見ればベテランの先生たちの素敵な授業や、子どもたち同士の関係づくりに圧倒されるばかり。とにかく一日でも早く「先生」として立派にやり遂げなくてはと言う想いが私を焦らせていました。

ところが七月初旬、国語の授業中に子どもがこんな事を聞いてきました。

「ねえ、せんせい。せんせいは、どこではたらいてるの？」

突然の質問に、少し驚き、思わず笑ってしまいました。と同時に、一人焦っていた私はその言葉で肩の力がすっと抜けたような気もしました。「先生はね、ここ（学校）で働いているんだよ」というと、子ども達は、知らなかったと言わんばかりの驚いた顔をしていました。

その時、焦らなくとも、私はもうこの子たちの生活の中に居る一人なんだなあ、ということに気づかされたのだと思います。格好良くて、堂々としている「先生」ではなくて、子どもたちとともに過ごし、悩み、考えている今の私でも十分「先生」なのかな、と。おそらく一年生の彼らにしてみたら、学校の先生＝学校で働いているという感覚が無かっただけなのかもしれません。いや、きっとそうでしょう。しかしその純粋な一言が、こんなにも私をあたたく包んでくれるとは。子どもの力、恐るべし。

教室を見渡せば、学習でつまづいている子、友達とケンカをしている子、毎日いろいろな事に出会います。その中で彼らは彼らなりに一生懸命考え、ぶつかり、学んでいます。もっと子どもを見よう。もっと子どもに寄り添おう。これまでの焦って十分に見ることができなかった子どもの姿が、少しずつ見え始めてきました。ゆっくりでいいよ、あせらなくていいよ。友達に聞いてごらん。先生にも教えて。私もあなたも、一年生。わからないこと、難しいこと、悩むことがたくさん。でも、自分のペースでやってみよう。そんな言葉を子どもにかけて、落ち着こうとしているのは、なにより自分かもしれません。

教員として走り出した私は、これから自分なりの「先生」の姿を、一生をかけて考えていくのだと思います。苦しいこと、大変なことがたくさんあります。でも一生懸命な子どもたちがいるからこそ、私もその一生懸命に応えたいと思います。

教員を目指す皆さんへ、「先生」は想像以上に大変です。が、やりがいはその分とても大きいと思います。大学での学びを大切に、思ったこと、感じた事、行動したことを少しずつ積み重ねていってください。共に頑張りましょう。



## 今後の予定

### 【2・3年生】

教員採用試験合格体験報告会

2017年12月 7日（木）13：25～16：30 美浜キャンパス 1511教室

### 【1年生】

教職課程オリエンテーション

2017年11月30日（木）3・4限 美浜キャンパス・東海キャンパス

2018年 3月28日（水）4・5限 美浜キャンパス・東海キャンパス

教職課程登録期間

2018年 3月下旬を予定

